

第28回IC小田原国際会議レポート

『やすらぎの家庭、思いやりの社会、誇りを持てる国、 そして 平和な世界をもたらすために』

去る6月10日(金)から12日(日)まで第28回IC小田原国際会議が、『やすらぎの家庭、思いやりの社会、誇りを持てる国、そして平和な世界をもたらすために』のテーマの下、アジアセンターODAWARAにて開催されました。この会議のために、オーストラリア、フィジー、マレーシア、カンボジアからの4名からなるアクション・フォー・ライフ(P.9註1参照)の修了生のグループを初め、カナダ、インドネシア、そして韓国からの海外代表6名も来日しました。更に日本で学ぶ中国からの留学生や日本在住の、イギリス、スリランカ、韓国の方々も参加されました。国内からも福岡や大阪等遠隔地からの参加者もあり、計11ヶ国・地域から約90名が参加しました。

開会式

開会式では、橋本徹国際IC日本協会会長の歓迎挨拶に続き、マレーシアでICの専従を務めるナンドール・リムさんより次のような基調講演がありました。

『中国の古典で孔子が記した大学という本の中に、「天下平、つまり平和で幸せな世界を打ち立て、治国、正しく国を治め、齐家、公正に家族を扱い、修身、教養を高め、正心、心を正し、誠意、誠実な想いをもち、致知、知ることを極め、格物、ものごとをあるがままに理解するという言葉があります。



私も完璧な人間などとはとても言えません。しかし、完璧になるのを待って自分の夢を実現しようと悠長に構えている訳にもいきません。私には夢があります。それは、私の国マレーシアが正直で愛される国になるということです。そのためには、まず自分自身が正直で愛される人間であるかどうかと問い掛けなければなりません。



■主な内容■

◆第28回IC国際会議レポート・1-6

◆アクション・フォー・ライフ・レポート・7-9

◆ICと私・10-11

◆会員の活動紹介・11-13

◆CRT日本委員会ニュース14

◆ICニュース・15-16

私は、いわゆる崩壊した家庭で育ちました。私が15歳の時に両親が離婚し、私は精神的に打ち捨てられ、肉体的には母親から虐待を受けました。私は、両親に対して不信や憎しみを抱いていました。子供時代は祖父母と共に過ごしたのですが、彼らからは他の人種を憎むようにと教え込まれました。彼らは、中国系マレーシア人は内戦の犠牲者だと言うのです。内戦とは1969年5月13日マレー人と中国人の間で勃発した人種対立暴動のことです。そして、「中国人とインド人には近づかない方がいい、いつ掌の平を返して裏切られるかわからないぞ」とよく言われたものです。しかし、実際私を裏切った人たちというのは、マレー人でもなければインド人でもなく、私自身の身内、両親だったのです。両親が離婚を決意したとき、私も他人に対して私の心の扉を閉ざす決心をしました。特に私とは違う人たちに対してです。

1999年にICの第9回アジア太平洋青年会議が台湾で開催され、私は参加をしたのですが、その時がICに出会った最初の時でした。家族の問題に関する台湾でのICのワークショップにいくつか参加した後で、自分の生き立ちが自分の性格形成にどのような影響を与えているのかを考えられるようになりました。そして、台湾のICの友人が、家に帰って、両親と一緒に生活すべきだと正面から言ってくれたのです。そんなことは一度も考えたことがありませんでした。そこでようやく気付いたのですが、自分自身の中に他人に対する不信と憎しみが渦巻いていながら、どうして世界に平和をもたらすことができるだろうかと考えたのです。インドでのICセミナーに出席した時、私は自分自身に問い掛けました。「他人が一步を踏み出すのを待っているのではなく、私自身が一步を踏み出したらどんなことになるだろう？もし、そうしても失うものは何も無く、自分自身を取り戻す事ができるのではないだろうか？」と。

過去4年間、私は両親との関係をやり直すべく努力しました。そして、私が自分の態度を変えると、すぐに私の両親への接し方や他の人との接し方が変わってきたのです。一番驚いたのは、自分が変わることで、マレー人やインド人の新しい友達が出来たのです。今、私に他人に対する不信感はなく、平和な気持ちのみがあるだけです。謝罪の力をもって、母国の中国人とマレー人の間の和解を始めていると言えます。

2004年にアクション・フォー・ライフというICのプログラムに参加しました。このプログラムはインドで始まり、カンボジアで終わるものでした。私がプログラム参加者と一緒にインドネシアへ行った際に、以前に出会ったインドネシア人が私に対してずっと嫌な感情を抱

いていたと打ち明けてくれました。「どうして嫌いなのですか」と聞くと、どうも私が言ったことが気にさわったらしいのです。

こんな小さなことで私達は後で笑いあったのですが、彼は、私に対して抱いていた憎しみと中国人に対して抱いていた偏見について謝罪してくれました。彼も子供時代に中国人を信用してはいけないと言われて育ってきたのですが、これは私が子供時代にマレー人やインド人を信じてはいけないと言われていたのと全く同じことです。私達は互いに友人となり、私はインドネシアでICリーダーシッププログラムとチーム作りのプログラムを行うと彼に約束しました。その後、数回インドネシアへ赴き、インドネシアのICチームの人たちと何回もワークショップを開催しました。

これが結論として申し上げたいことです。私はまず第一に自分を変え始め、それが家族に広がっていききました。第二に周りの人も私の態度が変わるにつれて、自分自身の生活を省みるようになりました。最後にここにいる皆様のような他の国の友人達と、自分の経験を分かち合うということを始められるようになったのです。

もしも安らぎの家庭・思いやりのある社会・誇りの持てる国・平和な世界をもたらすということを実現したいのなら、先ず自分から始めないといけません。自分が安らげるような、思いやりのあるような、誇りを持てるような、平和をもたらすような個人とならなければならないのです」。



●談笑するナンドール・リム氏(右から2人目)

体験の分かち合い

翌11日は、先ず、静かな時間を持つ意義がオーストラリアのナイジェル・ハイウッドさんから説明されました。続いての『自分のグループ・組織・社会の中の人間関係の向上のために』のサブテーマで開かれた全体会議では、バイオリニストの斎藤・アンジュ・玉藻さんから次のような話がありました。

『私は小学校5年生の時に父親が亡くなり大変ショックを受けました。父とはとても仲が良かったので喪失感が大きかったと思います。その後、学校に行けなくなりました。起きようと思っても回りが緑色に見えてしまっていて起き上がれず非常につらい状態になりました。小さい時からバイオリンを続けていたのですが、そのバイオリンさえ10分弾くと倒れてしまうような状態でした。そんな時、ご近所のお宅で音楽仲間が集まってバッハのブランデンブルグコンチェルト5番を楽しむのでどうぞいらっしやいと声をかけていただきました。それでも、みんなと一緒に弾けるかなと体調が心配でした。自信も無かったのですが、とりあえず行って見ようと思いました。

ところがそこでバッハの曲を弾いてみると急に元気が湧いて来ました。みんなと一緒にとてもうまく演奏できました。それ以来自分でも不思議なほどどんどん力が湧いて来ました。中学に入るころには元気が戻り自分に不思議な力を与えてくれたバッハについて本格的に勉強を始めました。そのうちにドイツのライブチヒでのバッハ・コンクールに出て見ないかという誘いがありました。課題曲を見るのがやっとという状態で、しかも最年少でしたがこれに挑戦してみました。結果は優勝者なしで、私も入賞出来ませんでした。ここに運命的な出会いがありました。

この時、バッハがカントル（音楽監督）として働いていた教会の現在のカントルに当る方が、私の演奏を聴いていて声をかけてくれました。そして、「このコンクールでの評価よりも私はあなたのバッハの演奏は素晴らしいと思う」と言ってくださいました。もっとこれから頑張らなさいと言って、2年後に彼の教会で演奏をさせてくれると約束してくれました。そして昨年、2004年にライブチヒの聖ニコライ教会でデビューを果たすことができました。その間も近所の方々の暖かいフォローがあり、お陰で去年のコンサートは大成功させる事が出来ました。また、ヨーロッパ各地や日本各地でも演奏が出来るようになりました。

バッハの音楽は人に力を与える事が出来ると実感しています。幼いときからバイオリンを始め、バイオリニストになりたいと思っていましたが、ただその時はまだ幼く、ただ格好いいから、目立つからと思っていました。一度弾けない状態になり、とてもバイオリニストなどやっていけるのかなと思った時、いろいろな方に励まされ音楽の力について考えさせられ、実感しました。私はバッハから力を与えられたという実感を人に広げて行きたいと思っています。

私のしたようなつらい体験と同じような体験をしている方や、もっとつらい体験をしている方々がおられると思います。私の演奏で少しでも心が励まされ、力が湧いてくるようになればと思います。人に力を与え、元気になっていただけるようなバイオリニストになりたいと思います。そして、世界中の方々のお役に立てればと思います。

今夜会場でバッハを何曲か弾かせて頂きます。バッハの曲には正直、純潔、無私、愛のICの目指す心がすべて備わっていると思います。人々を励ますすべての要素が詰まっているそのことを私の演奏でうまく表現出来たらと思っています』。

続いてフィージーのアバルナ・カトリさんは、次のように話しました。

『私はアクション・フォー・ライフの修了生の一員としてフィージーから参りました。昨年、アクション・フォー・ライフに参加したのですが、20カ国から45名の参加者が9カ月間生活を共にしながら東南アジアの様々な国を訪ね、宗教も文化も違う様々な人々に出会い、大変良い経験をしました。そして、その中でポジティブな考え方を身につけることができました。

特に良かったことは「静かな時間」を経験したことです。「静かな時間」とは自分の心の中に耳を傾けることです。私たちはとかくまわりのことには良く耳を傾けますが、自分の心の中の声の聴くことはなかなかありません。

一つの例をお話しましょう。ある時おじいさんと孫が市場へ買い物に行きました。買い物をした物を運ぶためにロバを手に入れました。そして、ロバの背に荷物を乗せて歩いて行くと、周りの人が「ロバに荷物を乗せるより人がロバに乗ればいいのに」と言いました。それでおじいさんと孫はロバの背に乗りました。しばらく行くと周りの人がまた「まあ、あんな小さいロバに二人も乗ってロバがかわいそうだわ」と言いました。すると孫はロバから降りて歩きました。またしばらくすると今度は、「ああ、かわいそうに子供が歩いて、おじいさんが楽をしているなんておかしいね」と言いました。するとおじ



●体験を話すアバルナさん

いさんは自分が降りて孫をロバに乗せました。すると今度は、「かわいそうに、ロバがあんなに疲れているのに人が乗っているよ」と言われたので困った二人は仕方なく、ロバをかついで歩きだしました。

回りの人の言うことばかり聞いていると、このようにいろいろと間違っ てしまいます。自分の心の中に耳を傾ける事が大切です。「静かな時間」を持つということはひとつの習慣のようなものです。ある時「静かな時間」を持ったとき、かつての上司のことが心に浮かびました。以前ボーダフォンの会社に勤めていたのですが、その上司といつもぶつかっていた。そのうち、憎しみがつのり仕事をするのが難しくなり仲が悪くなってしまったのです。二人の意見が違った時、私こそ正しいと思っていました。良く考えてみると自分が憎しみを持ったのでうまく行かなかったのだと気がきました。そこで、このような怒りの気持ちを捨ててイーメールを交換し始めました。そして、フィージーへ帰る頃にはまるで以前から親友であったかのように仲良くなりました。大きな組織や社会のなかにあっても先ず個人と個人が仲良くすることがコミュニケーションの基本だということが解りました。

人と人の良い関係を保つには自分の人格を大切にし心の深いところに耳を傾けることが大切だとおもいます。これが私の第一歩でした。このように勇気を出して第一歩を歩むと次の一步を歩む勇気が湧いて来ます。今朝、ナイジェルさんがまず自分自身が変わること、そうすると変化が表れると言いました。

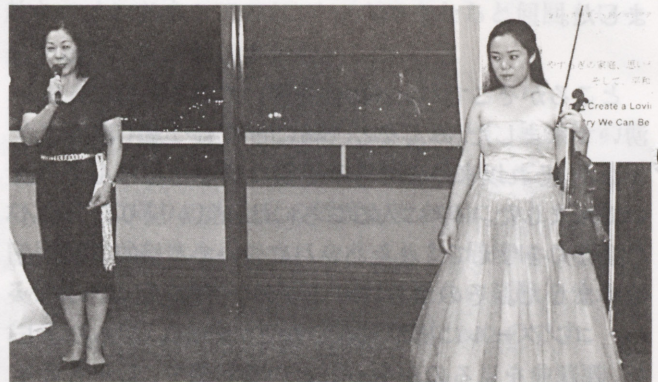
私達は政治や国が悪いと他人を責めてばかりいます。他人に指を差しています。まるで子供が何かこわれたら、君がやったんだと指さすようなものです。誰かに指を差すとき3本の指は自分の方を向いています。指差した相手より自分のほうが3倍悪いのです。

全体会議に引き続いて「小型武器と少年兵の問題について（鬼丸 昌也テラ・ルネッサンス代表）」、「日中韓の関係改善のために」、「ICへの理解を深めるために」という3つのワークショップが開催され、それぞれ一番関心の深いテーマを選び参加しました。

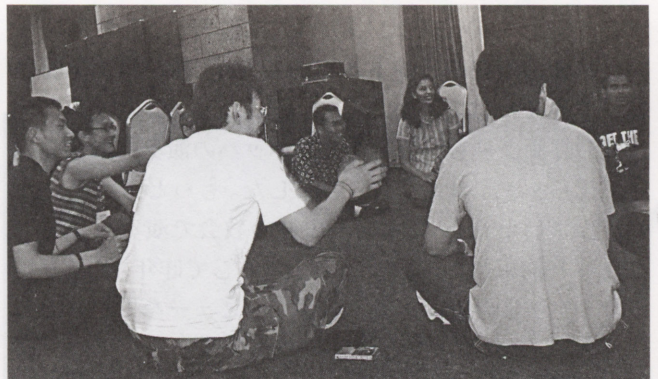
午後からは『やすらぎのある家庭と家族関係を作るには』のテーマでの第1回目の分科会が開かれました。午後3時からのお茶の時間には、ICよつ葉会のメンバーを中心とした女性たちの手作りのお菓子を堪能しながら楽しい懇談の一時を持ちました。その後には、『自分の所属するグループ・組織・社会での思いやりと人間関

係』のテーマで第2回の分科会が開かれました。

夕食後には、各国からの会議参加者による楽しい歌やパントマイムなどの上演の後、斎藤・アンジュ・玉藻さんによるバイオリンコンサートが開催されました。魂を揺さぶるようなアンジュさんの数々の素晴らしい演奏に酔いしれた晩となりました。プログラムが終わった後も各国の青年達はそれぞれの国のゲームを教えあつて盛り上がる等、参加者の交流は更に夜遅くまで続きました。



●素晴らしい演奏をしてくれたアンジュさん
(左は曲の解説をしてくれたアンジュさんのお母さん)



●各国のゲームを楽しむ青年達、もう国境は無い

翌12日も静かな時間のセッションから始まりました。続いての『誇りの持てる国作りと世界の平和作りのために』のテーマでの全体会議では、先ず、NGOのテラ・ルネッサンス代表である鬼丸昌也さんから、特にシエラレオネ、リベリアやウガンダ等のアフリカ諸国での子ども兵の問題の現状が生々しく報告され、又、トラウマを負った彼らが精神的なケアや技術訓練を受けて社会復帰が可能になるように努めている活動状況が報告されました。

続いてカンボジアの大学生であり、カンボジアでのICの代表を務めるキム・ブットさんから次のような話がありました。

『私はカンボジアから来た、ブットです。ここ日本にいられることを大変うれしく思います。

カンボジア中で日本の存在をいたるところで見ることができます。首都プノンペンではカンボジア・日本友好橋が首都の二つの部分をつないでいます。また、日本人は有名な仏教寺院遺跡が立ち並ぶアンコール・ワットの修復にも力を貸してくれています。カンボジアを旅すると、皆様の国日本と私の国が共同で行うプロジェクトを多く見ることができます。ですから、私が皆様の国にいるということは、日本と日本人に有難うございます、とすることができる訳で、それはとても素晴らしいことだと思います。

アクション・フォー・ライフにも大変感謝しています。もしこのプログラムに参加していなければ、今日私はここにいないからです。このプログラムが私の目を世界に開いてくれました。他の文化や信仰についての理解をもたらしてくれましたし、自分自身についても多く学ぶことができました。

私の住む東南アジアという地域は20世紀に多くの困難に見舞われました。そして、そこからまだ回復してはいません。カンボジアは汚職と貧困が至るところにびこる国です。ICについて学ぶ前、私はこうした国の問題の一部でした。私も、他の多くの人と同じように、社会が私に何かをすべきであって、社会のために私が何かをすべきだとは考えていませんでした。

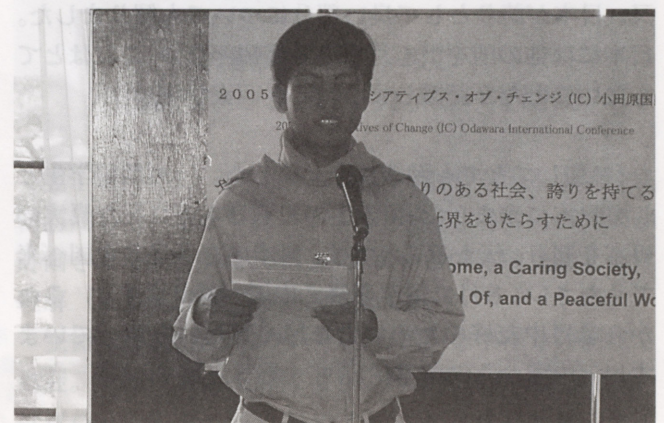
私の国の問題の一つは、隣国ベトナムとの関係です。1979年にベトナム軍はクメールルージュと戦い、その撃退を助けたのですが、その後もカンボジアに駐留し、権力を掌握しました。今日でも多くの国境問題が両国の間にあり、不法ベトナム人移民の存在があります。子供の頃、ベトナム人は信用できないと教わり、家族も社会もベトナム人は我々の敵だと教えてきました。私は常日頃、ベトナム人は私をだまそうとしているし、この国を破壊しに来たのだと感じていました。

2002年に、マレーシアでの第10回ICアジア太平洋青年会議に出席しました。そこで初めてICの4つの道義標準である絶対正直・絶対純潔・絶対無私・絶対愛について考え始めました。そして、私のベトナムへの憎しみというものが、自分にも、そしてベトナム人にも影響を与えていることに気がつき始めました。会議で、ベト

ナム人の女性が立ち上がり、カンボジア人グループにベトナムがカンボジアにしたことについて謝罪しました。私は感動して、彼女と話をしに行きました。そして、「ベトナムにも、カンボジア人が感じている痛みを感じることもできるベトナム人がいることが分かったのは、大きな希望です」と告げました。二人で、連絡を絶やさず両国の関係改善のために一緒に働こうと約束しました。カンボジアでも、ベトナムでもICグループが立ち上がりました。以来、私はベトナム人と親しい友人を作ることができるようになりましたし、私たちはいろいろなプロジェクトを一緒に行うようになりました。

2003年に、カンボジアで第11回アジア太平洋青年会議を開催しました。日本のICチームから、カンボジアからの出席者への支援金として6,000ドルの寄付を頂きました。会議のある日、一人のカンボジア人参加者が、「ベトナムのカンボジア支配のためにベトナム人を愛するのは非常に難しい」と発言しました。この発言に、ベトナム人参加者はかなり動揺し、会議を途中退席すると言いました。幸いにもその日の最後に話し合いの場がもてました。その結果、毎晩ミーティングを持つようになり、お互いに対して正直になり、謝罪やお互いの感情について話し合うことができるようになりました。この一人のカンボジア人の正直な発言が、「カンボジアーベトナム対話」プロジェクトへと発展しました。最初の「カンボジアーベトナム対話」プロジェクトは昨年第一回が行われ、14名のカンボジア人がベトナムへ行き、APYCで出会ったベトナム人と10日間の活動を行いました。この10日間でお互いをよく知り合うことができ、両国関係にいかにか癒しをもたらすかについて議論を行いました。カンボジアでは今年7月に25人のベトナム人を迎えて第二回「カンボジアーベトナム対話」プロジェクトを行う予定です。(P.16 参照)

カンボジアへ帰国したら、教職を辞し、ICの専従スタッフになる決意をしました。大変なことは思いますが、私には若さと情熱があります。この決断が、国内の

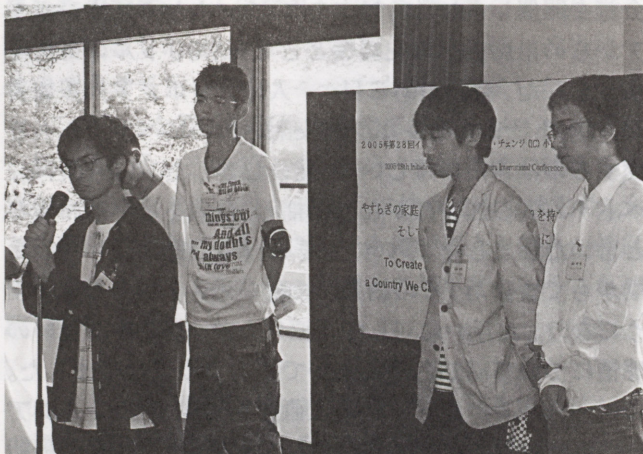


●情熱の伝わって来たキム・ブット氏の話し

多くのICメンバーと連絡を密にし、より自由にICの考えを多くの人々に広げていけることにつながってくればと願っています。

皆様にも是非カンボジアに来て、この仕事のお手伝いをして頂きたいと思ひますし、その際には勿論皆様をカンボジア流におもてなしさせていただきます。』

更に、韓国で開催された、日韓、或いは、日中韓の大学生フォーラムにこれまで参加した、日韓ICユースの青年たちから、それぞれがこれらの交流を通して培った友情や相互理解、そして、これからの更なる関係改善についての確信が述べられたことは会議参加者に大きな希望を与えました。



●より良い関係作りに励む日韓の青年達

更に、『誇りの持てる国作りや世界の平和作りと自分の関わり』のテーマで第3回目の分科会が開かれ、昼食後には、最後の全体会議・閉会式が『やすらぎの家庭、思いやりの社会、誇りを持てる国、そして平和な世界をもたらすための私の第1歩』のテーマで開かれました。この会議では参加者から次のような話がありました。

『今回参加していろいろなことを学びました。世界には日本人のように恵まれていない人々が沢山いること、少年兵だったり、満足な教育が得られなかったり。又、日本が誇りとして良い部分についても解りました。日本には他の国を恨んだりする感情がない。これはとても良いことだと認識しました』 (大学生)

『参加してとても勉強になりました。短期留学生として日本に来ました。留学生の役割は本当に見た真実の日本を知り、伝えることです。日本の方も是非中国へ来てください。8月に留学を終え中国へ帰ります。これからは日中友好のために力を尽くしたいと思っています』 (中国からの留学生)

『毎年この会議に参加すると心が洗われます。でも、毎年1回ではいけません。毎日が大切です。私の世代は終戦のあと小学生になったので過去への反省が強いのです。日本の誇りを持つことはあまり考えませんでした。

その後、仕事で海外で暮らすとよその国の人々は国に対する誇りがあることに気がきました。では日本の誇るべきことは何でしょうか。誇るべきことは次ぎの3つあると思います。一つは日本は60年間戦争をしていない。

2つ目に日本は武器を輸出していない。3つ目には民主主義が徹底していて政治犯や政治亡命もない。又、この会議に来て知りましたが兼松恵さんのようにカンボジアの未来のために働いている方、又、ウガンダで働く鬼丸さんという同胞がいることは誇るべきことです。

いま重要なことはとことん話しても一致しないことがあるということです。それでも仲のよい関係を保つことが大切です。同じ両親から生まれる兄弟であってもまた、夫婦でも考えの違うことがあり、この違いを認め、この違いを許し合うことが大事です。国際社会では、国を見る前に、個人を見なさいと言われます。物事の本質は何か良く考えて互いに仲良く生きることが大前提です』 (元ビジネスマン)

最後に、来年の会議でそれぞれが今回の会議に参加して決心したことの実践の報告ができるよう期待しながら本年の会議を閉会しました。



●小さなグループで自由な意見交換を図った分科会



●直ぐに親しくなった日中韓の青年達

定着した学校訪問・ホームステイ

— アクション・フォー・ライフ修了生グループのその後の活動 —

今回の小田原会議には、オーストラリア、フィジー、マレーシア、カンボジアからの4名からなるアクション・フォー・ライフ (AFL) の修了生のグループが参加しましたが、インドネシア、そして韓国からの大学生等3名が加わり、会議の後にも、学校訪問等のプログラムが続きましたので、その様子をお伝えします。

<スケジュール>

6/13 (月)

「箱根小学校」訪問 (3回目) と箱根見学

6/14 (火)

午前 「箱根湯本中学校」訪問 (初)

午後 「川瀬学園小田原ファッションアカデミー」
訪問 (3回目)

夕方 ホストファミリー5家族との合同交流懇親会

6/15 (水)

午前 「箱根湯本小学校」

午後 「箱根仙石原中学校」(共に初訪問)

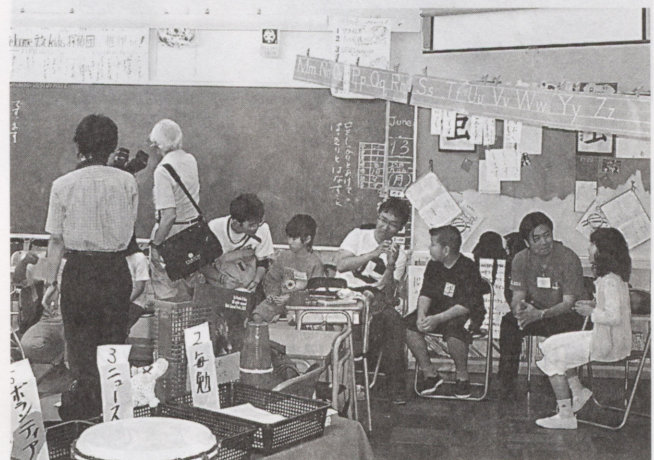
AfLの一行9人は、国際会議終了の翌日に当たる6月13日(月)、小田原箱根SGGクラブ(善意通訳者の会)の池田百合子会長の案内で箱根見学に出かけた。目的は、東の間の骨休みを兼ねて、日本の誇る観光地富士箱根の自然や文化に直接触れることと、そのルートにある箱根小学校を訪ねることであった。

箱根小学校での交流会

当日は、先ず大涌谷を訪れ、今も所々に吹き上げる硫黄の湯煙に、まさに地球は生きているを実感。次いで箱根小学校を訪れた。AfL関係者にとっては、今回が3度目、一昨年の中国国際交流協会郁文先生を団長とする訪日代表団一行の訪問を加えると4年連続の訪問となった。

箱根小学校の今年の児童数は全校で32名、教師の数は16名を数える。そんな環境下にあつて、この学校では、国際観光地という地の利と、国際化という時代の流れ(天の時)を活かして、鈴木恒美先生のリードのもと、歴代の校長・教頭先生らのバックアップを得て、極めてユニークな総合学習(国際理解教育)が展開されている。一行は同校に着くと、先ず鈴木先生のリードで4年生の教室を訪れた。そこではにぎやかな自己紹介の後、7名のAfLメンバーには、生徒が一人ずつペアとして付き添い、手作りの折紙などがプレゼントとして手渡された。その後、食事場所の視聴覚教室に向かい、そこで先生方と全校生徒に温かく迎えられた。そこでは異学年の生徒たちとも一緒にグループ毎に食

事。その時の会話を通じて更に相互の交流は深まった。昼食後は、場所を体育館に移して全員との交流会。歓迎の挨拶の後、AfLのメンバーによる自国紹介や体験の発表とニュージーランドの先住民のマオリ族の歌と踊りの披露や指導があった。又、生徒達からAfLメンバーの出身国について、活発な質問が寄せられた。



●教室で生徒達と交流するメンバー達

その後、箱根神社や「箱根の関所跡」を見学。こうして日本の歴史と文化、更には自然に触れつつ、箱根小学校の全校生徒や先生達との交流を通じて、相互理解の促進を図った様子が、箱根町の広報誌7月号の表紙を飾り、全町民に大きく伝えられた。

その時アテンドした一人ひとりの生徒から、「一緒に食事をしたり、話ができてすごく楽しかった。また、いつか是非お会いしたい」などという趣旨の手紙が、思い出の写真と共にAfLメンバー一人一人に送られることになっている。

箱根湯本中学校と 小田原ファッションアカデミーを訪問

翌14日(火)の午前中には、箱根町立湯本中学校を初訪問した。ここでは、1~3年生55名合同の交流が計画された。目的は、AfLメンバーとの体験交流と相互理解(異文化理解)の促進である。

生徒達は、AfLメンバー(6カ国)を手作りの国旗で歓迎。生徒代表の主導により、体育館に於て、交流会は進行した。リーダー役のオーストラリア出身のナイ

ジェル・ヘイウッドさんによるAfLの説明、世界地図を背景にメンバーの自己紹介と体験発表やマオリ族の歌と踊りやAfLの“暗闇に灯りをともそう”のテーマソングを紹介。このあと、生徒達からはメンバーの出身国について、事前に調べた知識をベースに英語で質問をし、それぞれの国についての知識と理解を深めた。第二部では、盆踊りを輪になって一緒に踊りながら、交流を楽しんだ。



●踊りを習うメンバー達

続いて午後には、今回で3回目となる小田原ファッションアカデミーを訪問した。ここでは川瀬校長の歓迎の挨拶の後、AfLメンバーの語る体験に80名の学生たちは熱心に耳を傾けると共に、歌や踊りを楽しんだ。(この模様は、地元紙「神静民報」の3面トップに写真入りで大きく報道された。) なお、ここでは交流会終了後数人の女子学生がメンバーに歩み寄ってきて更に会話が弾んだ。その中には昨年、「皆の前で感想を述べる勇氣はなかったが、若い同世代の体験と人生の決心を聴いて深く感動した」旨を涙ながらに語った二人の学生もいて、そのうちの一人は、将来、タイのデザイン学校で勉強をしたい旨の夢を語った。



●小田原ファッションアカデミーの先生方と生徒さん達と

ホストファミリー5家族との合同交流懇親会

今回、AfLメンバーのために、特別にホストファミリーを引き受けてくれたのは、いずれもこれまでもお世話になってきた地元を中心とした5家族である。今回は、地元の二宮秀夫さんが代表を務められるMRA (IC)

小田原サークルが主催者(世話人4名が参加)となり、ホストファミリーへの感謝を込めると共に、AfLメンバーに対する地元としての歓迎と慰労、並びにホストファミリーへのAfLの活動の紹介も兼ねて、交流懇親会が開かれた。席上、二宮さんは、歓迎の挨拶に加え、過去10年間毎月例会を持ち、設立目的である「小田原を良心のまちにしよう!」の理念を愚直に追求してきた旨を語った。そして、新しい動きとして、市民の間に新しい意識が芽生え、中心市街地の活性化のためにポートピア(舟券売場)を招致しようとする動きに対しても、単なる反対運動ではなく、対案を示す形での運動が展開されるようになった経緯を紹介した。その結果、思いもかけない方向に事態が展開し、その他の類似の問題に対しても、新たな市民レベルの動きに連動し、それが行政を動かしつつある現状を説明した。

続いて会食の後、AfLメンバーによる各ホストファミリーの紹介が、ステイ中の家族と自身との交流体験や観察を交えながら、表情豊に生き生きと行われた。続いてAfLの活動の紹介と共にメンバー個人の体験と共に歌や踊りも披露され、更に交流を深め合った。



●ホストファミリーのご家族と共に

箱根湯本小学校と 箱根仙石原中学校を訪問

次いで、翌日の15日には、午前中、箱根町の湯本小学校を訪問した。引率の2名を含む一行7名は、6年生を除く全校生徒約120名に温かく迎えられた。5年生代表による歓迎の挨拶の後、フィジー出身のアパルナ・カトリさんが、リードして交流会は進行。二人のメンバーの内、一人はイタズラを咎められるのが怖くてウソをついてしまったこと、もう一人は自分のミスを他人になすりつけてしまったこと、そして、共にそれを正直になって謝ったときの体験を生徒たちの目線に立って巧みに語った。生徒たちの反応は極めて敏感で率直。個人的体験に裏付けられたICのメッセージがストレートに受け止められたことが、活発な質疑応答からもよく感じ

取ることができた。その後、メンバーによるマオリ族の歌と踊りの披露と指導、これは生徒たちも大いに気に入ったようであった。

これを受けて同校の教頭先生は、正直ということについて、日本でも古来から言い伝えられている教え「天知る、地知る、我知る」という言葉を説明しつつ、正直の大切さについて語られた。最後に、校歌の斉唱、次いで生徒代表による感想と感謝の言葉が述べられた。昼食は各学年毎5グループに分かれてとり、生徒たちと交流を深め合った。



●マオリ族の歌と踊りを皆で練習

続いて一行は、箱根の仙石原中学校に向かい、1・2年生約60名との交流会を行なった。ここでも、AfLの二人のメンバーが自身の個人的な体験を話した。その内の一人、カンボジアのキム・ブットさんは、自分は国に帰れば教職の仕事が待っているが、国の将来のため、青年たちに自分がAfLで学んだ生き方の確信を伝えていくことにした。そのため、教職をしばらく投げうって、この活動にボランティアとして専心していく決心である旨を語った。その後、5つのグループに分かれて、AfLメンバーと英語での会話や交流が行われ、相互理解を深め合った。終了後、年配の教科主任の先生は、「今日の青年の確信を聴いて、志をもって生きることの清しさを実感した。後輩の若い教師に奨めたい気持ちだ」と語った。

その後の活動

箱根と小田原での活動の後、グループは、鎌倉を訪ねた。生憎の雨模様とはなったものの、そのために静かな古都で美しい寺院建築や日本庭園等日本の伝統美を満喫した。

翌17日には、国際基督教大学を訪ね、鈴木学長や中村学生部長と懇談を行うと共に、試験中で人数は少な

かったものの留学生や日本の学生の方々とも交流する機会を得た。

翌日の18日には東京でIC交流会が開かれたが、今回の日本で学んだこと、感じたこと等が披露された後、IC女性の会のメンバーやそのご家族の手作りの食事に舌鼓を打ちながら、楽しい懇談の時間を過ごした。その他にも、ICユースのメンバーの大学生たちとの交流会が数回開かれ、メンバーの通う早稲田大学を案内してもらい機会も得た。一行は6月21日にそれぞれ再会を約しながら帰国の途に就いた。



●ICよつ葉会主催のお茶会で作法を学ぶ



●ICユースのメンバーとの交流



●早稲田大学への訪問

【註1：アクション・フォー・ライフ (AfL) 各国の青年たちが寝食を共にし、インドを初めアジア各国を回りながら、その国々の人々と知り合い、文化等も学ぶと共に 自分自身の成長を図ることを目指す9ヶ月にわたるIC国際青年教育プログラム。2001年の9月から第1回が、2003年の9月から第2回が開催され、本年の9月1日から2006年の8月3日まで第3回のプログラムの開催が予定されている】

2001年9月11日のアメリカでのテロは19名のイスラム原理主義者によって引き起こされ、世界を恐怖に陥れました。しかし、イスラムの本当の教えと姿を理解する一助としてイギリスのICの方々が、IC(MRA)と出会ったイスラム教徒19名の方々の体験や考え方を紹介した「何故テロか—他に選択肢はないのだろうか? /Why TERROR—is there no alternative?」という小冊子を作りました。日本人に馴染みの浅いイスラム教への理解を深めて頂ければと、この小冊子を翻訳して順次ご紹介しています。第3回はインドのイスラム教徒の方のストーリーです。

◇ I C と 私 ◇

曲がった棒が真っ直ぐな影を作ることはいできない

ハルーン・カブリー (インド、弁護士)



曲がった棒が真っ直ぐな影を作ることが出来ないように、憎しみに駆られた行動では、愛を作り出すことはできない。憎しみは憎しみを生む。イスラムは愛と平和の宗教である。

現在、多くのイスラム教徒がマホメットの人生を忘れてしまったようだ。マホメットがモスクへ行く途中にあるユダヤ人女性の家を横切るとき、その女性に汚物を投げつけられたものだが彼が怒ることはなかった。彼はそれを払いのけ再び歩み出した。ある日彼がそこを通ったとき、彼女が見当たらなかった。尋ねると、彼女が病気であることを知らされた。近所の人に付き添われ、彼女の容態を聞きに行き、そして彼女が必要な薬を持っていった。そのユダヤ人の女性は自分の行動を恥じた。我々の生活を定めている模範はこのようなものだ。

心からの謝罪

1952年以前には私は日に5回祈り、コーランを読み、イスラム教徒がすべきことをしていると思っていた。そして、フランク・ブックマン博士 (ICの前身-MRAの創始者) と、彼がボンベイに率いて来たMRA (現IC) の国際チームと出会った。彼らのミーティングでは、スピーカーたちが次々とステージにあがり、自分たちの経験を話してくれた。彼らの話は全て私にあてはまるように感じた。家へ帰って、それらの話について考えた。そして、一つの考えが私の心を捕らえた。「これまで長年積み上げてきた混乱をそのままにしてこなかったか?」。私はこの考えを無視して仕事を続けた。しかしながら、何か私を引き寄せ、それらの混乱について再び考え始めていた。はっきりした考えが浮かんだ。「この混乱を取捨する唯一の方法は心からの謝罪である」と。

イスラムの中身を磨く

私はコーでの夏の会議に招かれた。二ヶ月を過ごす予定で出かけたが、結局10ヶ月間滞在することになった。

そこで、後にチュニジアの大臣になったモハメッド・マスモウディ氏が「MRAは私を良いイスラム教徒に変えた」と話したのを聞いた。更にイラン国王の代理で来ていたハザギー氏が「私は毎年ここへイスラムの中身を磨くために来る」といつているのを聞いた。更に、エジプトのファローク国王のいとこであるハッサン王子や、ガーナのイスラム教徒の族長であるトロン・ナ氏らが話を続けたが、彼らの話は皆印象的なものだった。そこで私は、祈ることのみで良いイスラム教徒となれるのではない、又、他人の感情にも配慮し、そして人と人、そして神と人とを引き離す障害を取り除いていかなくてはならないと悟った。

私がインドのあるグループの会長のとき、ラジモハン・ガンジー氏 (註2 P.11) を講演者として招いた。彼の話の後、誰かがこう尋ねた。「イスラム教はあなたの今言ったこと全てを教えてください。なぜ私たちがMRAのメンバーになるべきなのでしょうかね?」するとガンジー氏は私に答えるよう言った。

棚の上高くに

私は、「MRAはメンバーに加わるというような組織ではない。MRAとは、静かな時間をもって、正直、純潔、無私、そして愛という4つの絶対的な道徳基準に基づいた生き方そのものなのです」と言った。

そして私は、ある話をした。「ある工場の持ち主 (オーナー) が外国に住んでいた。彼はそこから定期的に手紙やメッセージを送り、工場マネージャーにどう経営していくかを伝えていた。そのマネージャーはオーナーを愛しており、彼とのコミュニケーションをととても尊重し、その手紙をシルクの布で被い、棚の上の高い所へ保管した。年月が過ぎ、工場の設備は少しずつ劣化していった。ある日、友だちがそこを通りかかり、工場の状態を見てマネージャーに尋ねた。『オーナーは君に工場の運営に関する指示を送り続けているのじゃないの?』彼は答えた。「うん。彼は連絡をくれてるよ。僕は彼とのコミュニケーションをととても尊重していて、棚の上高くに大切に保管してあるんだ。」「なぜそれらのメッセージを実行すべきと思わないんだ?」と友だちは言った。

完全なる服従

このストーリーのオーナーとは神であり、コミュニケーションとはコーラン、マネージャーとは私たち、イスラム教徒をあらわしている。そして友人とはMRA(現IC)のことである。道徳とは次の言葉でまとめられるだろう。『ただ考えるだけで実践に移そうとしない理想は、

私たちを支配する憎しみや分裂や貪欲といった現実に抵抗出来るような力を備えてはいない』。もし、今日のイスラム教徒たちが我々の宗教をそのメッセージに基づいて実践し、人類への愛を示し、神に完全に従い、信仰心を持つならば、我々は新しい世界を持てることになるだろう。

(註2 ラジモハン・ガンジー：マハトマ・ガンジーの孫で、ジャーナリスト、上院議員等も務めた。インドICのリーダーの一人であり、現在はアメリカの大学で教鞭を執っている)

一 会員の活動紹介

会員の方々がそれぞれどのような活動をされているのかを紹介するコーナーです。皆様からのご投稿も歓迎致しますので是非お寄せ下さい。

「傾聴」は、心の扉を開く

田畑 昌子 (福岡・TA傾聴講座担当)



「手をさしのべてくれる人はいても、心の寂しさを埋めてくれる人はいない」という言葉に出会いました。物質が豊かで、欲しいものはすぐ手に入る時代ですが、本当の豊かさとは何だろうか、と考える機会が訪れました。

癌末期、余命6ヶ月の告知を受けた女性、故小山ムツ子さんとの出会いです。彼女は、「余命6ヶ月あるのよ、何かしたい、今、自分にできること」について話してくれました。「自分の話をひたすら聴いてくれる人が欲しい。意見は要らないから、ただ聴いてくれるだけでいいの」。その望みが、人の話が聴ける人たちが育てようと発展し、福岡市で「傾聴力養成講座」が平成8年に開講されました。小山さんが癌であったこともあり、内容は癌末期の方を傾聴する講座でした。(平成13年迄続きました)

癌末期の方の傾聴をさせてもらいながら、多くのことを学ぶ貴重な体験となりました。旧知の婦長さんから「入院中でナースコールを鳴らせっぱなしの高齢の男性患者さんが居るのよ、なんとかありませんか」という依頼でした。その方は「シベリア抑留」の辛い話など、じっと天井を見つめながら話してくれました。「辛かったらうね」とただ共感するだけで時間は過ぎました。翌日婦長さんから電話がありました。「夕べは、ナースコールが鳴らなかったのよ、不思議ね」。過去の辛さを誰かに分かってくれたのかもしれない。傾聴する者にとっては、忘れかけた戦争の体験を知ることができ、今の豊かさ故に忘れていたものを気づくチャンスにもなります。死と向かい合うとき、人は自分の過去を自分史を語るように話してくれることが多くありました。自分の人生を納得なさっているのではないかと思います。

それを聴く者は、何も言葉はいりません。ただ受け入

れるだけで良いのだと思いました。

多くの方は「自分は、人の役に立っただろうか」と問われます。この言葉は、私にとって生きることの価値観だと思ふようになりました。「お金や地位や名誉ではなく、どれだけ人の役に立てるか」ということなのではないかと思ひます。

私には、ひとりの兄がいました。兄は、幼い時から体格が小さく、私には、弟のような存在でいつも兄を守る立場をとっていたように思いますが、成人してからは、いつでも大声で豪快な笑い声と明るさで何ごととも乗り切った兄でしたから頼もしく感じていました。その兄が60歳を目前にして、突然の自死。直前、日頃音沙汰無しの兄からの電話、兄の訪問、「どうしたの、今忙しい時だから、そのうちに行くからね」と冷たく返していた私は、目の前が真っ暗になりました。人の話を聴くことに奔走しながら、身近な兄の心の声を聴くことができなかつたのです。兄は、強い人だから、との思いこみから後回しにしてしまった自分を責めました。

平成15年5月、「生きるための傾聴」、よりよく生きるための傾聴講座を勉強の仲間と共に開設することができました。NPO日本交流分析協会九州支部で、交流分析という分かりやすい心理学をベースとした「TA傾聴基礎講座」を開設し、毎年5月から半年かけて「聴く」ことを学んでいます。受講生の感想の一つは、「相手の話したいことを聴いているのではなく、自分の聴きたいことを聴く自分が居ることに気づいた」など、自分の聴き方の癖に気づかれることなどもあります。「自分の癖」や思いこみに気づいて、そこから改善ができるのだと思います。「傾聴」で自己と他者の心の扉を開き、よりよく心豊かに生きるきっかけになって欲しい、その人がどのように生きたかが、死に方につながるのだと思うのです。

フィリピンで学ぶICの教え

鹿取 美江 立命館大学国際関係研究科修士課程前期2年生

私は、今年の3月下旬から、大学の交換留学制度を利用して、フィリピン国立大学に留学しています。ICには、2003年のコー世界大会参加以降、関西例会、アジア・大平洋青年会議（APYC）、韓国での東北アジア青年フォーラム、そして、小田原国際会議への参加という形で、関わらせていただいています。

私は今、フィリピンにいます。日本から飛行機でわずか4、5時間で着いてしまうのに、見るもの全てが日本とまるで違うこの国で、時に戸惑うこともあります。私は今日も元気に、人生における掛け替えのない時を過ごしています。フィリピン大学は今夏休みで、私はサマークラスを取っています。私は毎日、プリントでいっぱい大きなかばんを肩にかけ、半そでにジーパン、そして履きなれたスニーカーという格好で、登校途中の学生でぎゅうぎゅう詰めのジープニー（乗りあいタクシー）に乗り込み、学校に通っています。近頃、そんな姿もだいぶ様になってきました。

私には、登校時、欠かさず持っていくものがあります。それは、携帯電話、大学キャンパス内の地図、それに緊急連絡先のメモです。携帯電話は、私がフィリピン大学に来て間もない頃、ホストブラザーがいろいろな店に足を運び、吟味の上選んでくれたものです。地図は、私が、大学の寮に移り住む日の朝、ホストファーザーが、きっと役に立つだろうと、手渡してくれたものです。緊急連絡先のメモには、ホストファミリーの家の住所や電話番号、それに、大学の近くに住んでいるホストファミリーの知り合いの家の住所や電話番号などが丁寧に書かれています。そのメモには、ホストファミリーお勧めのポトルウォーターのブランド名や最低限必要なタガログ語の単語なども書かれています。

ホストファミリーは、私がこれから約一年間フィリピンで暮らしていく確かな土台を作ってくれました。私は、これらを見るたびに、ホストファミリーのことを想うのです。

私は、大学でサマークラスが始まるわずかばかり前にフィリピンにやって来て、大学の寮に住むまでの数日間、ホームステイをしていました。ホストファミリーは、IC日本事務所の長野さんに紹介していただいた、同じくICメンバーの方々です。“フィリピンICのことが知りたい”“フィリピンで知り合いがいたらどんなに心強いかな”という思いから、長野さんに相談したことが



●フィリピンの子供達と

きっかけです。

今でも鮮明に思い出される光景があります。それは、私が不安いっぱい、マニラ空港に降り立った日のことです。たくさんの人々が慌しく行き交う到着ロビーで、きょとんとしている私を、ホストマザーは、とても暖かく迎えてくれました。会ってすぐに、いままで緊張していたのがうそのようにリラックスしていき、それに気づいた時の驚きは、今でも鮮明に覚えています。お客を迎え入れるというよりむしろ、遠くに住む家族の帰りを待っていてくれた、そんな雰囲気を感じていました。ホストファミリーとの日々は、とてもステキなものでした。彼らから、ステキな生き方を教えてもらったように思います。それは、今日という掛け替えのない一日に自分に何ができるかを考え、そして今日という日を存分に楽しむということです。ホストファミリーは、一日の始めに“静かな時間”を設け、今日という日に自分に何ができるかを考え、そしてそれを実行しているのだと教えてくれました。また、彼らは多彩な趣味を持ち、たくさんの人々の輪の中に、生活を置いていました。ホストファミリーが一日中家にいることはほとんどなく、いつもどこかへ出かけ、彼らにできることを人々に提供し、そして、彼等自身が、こころからそれを楽しんでいるようでした。

“なんの変哲もない、退屈な日々”“常に何かに追われ気づいたら終わってしまった今日”こんな時の感覚に支配された社会で暮らしてきて、私は、ホストファミリーの生き方がとても新鮮でステキなものに思えました。

先日、ホストファミリーに連れられて、フィリピンICの例会にも参加してきました。例会は、一ヶ月に一度、フィリピンICのリーダーの方の家で開かれているそう

で、毎回、10人弱くらいのメンバーが集まるそうです。メンバーの方々は皆、長年にわたってICに携わってきた人ばかりで、例会は、気心した友達、もしくは家族との団欒といった雰囲気で行われていました。どことなく、私が日本にいる間に参加していたIC関西例会に似た雰囲気を感じ、私はすぐに打ち解けることができました。さて、母国を離れ、ある種の開放感と、豊かな感受性、それに客観性を手に入れ、私は今、ICについて考えています。私は、フィリピンに来て、ホストファミリーや、その他のICメンバーに出会い、ICのすばらしさを改めて実感しました。同時に、道路わきの掘っ立て

小屋に住む人々、物乞いをする人々を見るにつけ、ICの提唱する“まず、自分から変わる”という言葉がちっけて無力にも思えてきました。しかし、その“自分”とは、ホストファミリー、フィリピンや日本、その他数多くのICメンバーにとってのそれでもあるのだとしたら…。私は、自分に問いかけています。

ICの壮大なる教えは、それへの疑問、葛藤の過程なくして、到底理解しえないもののようにも思えます。私は、母国を離れた今、ゆっくり自分自身と向き合う時間を設け、また、たくさんの人々と出会い、壮大なるICの教えの意味深さに触れられたらと思っています。

『一番大切なものとは何でしょう？』

カピラ・パンダラ・ゴダクンブラ



私は、34才のスリランカ人です。

日本にお世話になって約10年になります。その間IC(MRA)の皆さんに大変お世話になり、今や子供二人の父親にもなりました。

私の人生で、今一番大切なものは子供たちと家族です。そのために自分の命をかけています。でも、もし明日何か起きて、私だけこの世の中に残されたとしたら…。嫌です。そんなことは考えたくもないです。皆様は、このようなことをお考えになったことがありますか？しかし、2004年12月26日に、この恐ろしいことをスリランカ人の60%が実際に経験しました。津波自体を全く知らなかったスリランカ人。子供大人に関係なく、スリランカの人々の命、大事な家族が、みんなの将来が、そして、全ての財産が一晩で、何時間で、大津波によって流されてしまったのです。残されたのは、まるで魚が死んでいるような人々の遺体、ゴミ、そして、ばらばらになった家族だけでした。

亡くなった子供や大人の遺体を焚きながら泣いている残された人々が、海を見ながら同じ言葉を叫んでいました。それは「自分たちも同じように殺してくれ、でなければ、海に飛び込んで死んでやる」と、ただひたすら叫んでいました。これから自分たちが生きて行く目標が失われたからだろうと私は思いました。それだけでなく、亡くなった二人、三人の遺体をオトバイに載せたまま、「どうしよう... どうしよう...」と、どうしたらよいか分からなくなって途方に暮れている人も少なくなかったのです。また、遺体を自分勝手に処理する

ことができなくなり、遺体が息ができなくなるほど、臭くなったこともありました。

自分の家族を捜している子供や大人も少なくありませんでした。学校ごと流され、もう二度と勉強できることはないだろうと子供たちや先生たちが悲しんでいました。

海の仕事をしている人は魚を釣ってきても、魚が売れず、捨てることになったのです。それは津波で流された遺体を魚が食べたのではないかという考えがあったからです。

スリランカは、観光とのつながりでの仕事が多く、今回観光スポットがほとんど流されたために、仕事に困るようになった人々も多くありました。

今までスリランカで22年間の内戦があったことは皆さん御存じのことと思います。この津波で敵味方なく多くの人々が亡くなったことにより、一体何のために22年間もお互いに戦ってきたのかということをもみんなが疑問に思うようになりました。自分たちがそれぞれ守ってきたもの全てが流され、又、自分たちを守るために一生懸命埋めた地雷も津波で自分たちの家にまで流されて来たり、地雷をどこに埋めていたのかも分からなくなっています。自分たちを守ってきたはずのものが、今、自分たちを逆に危険な状況にさせているのです。津波にはスリランカ人であろうが、テロリストであろうが、関係なかったのです。全て流された結果、今になって皆がより深く考えるようになったことは良かったと思います。

困っている私たちの国民のために、なんらかの形で皆様のお助けを頂ければとても有り難いと思っています。

▼▼ CRT 日本委員会ニュース ▲▲

最近の動向について

■急展開を見せているCSRイノベーションについて

1994年にICの基本理念である“まず自らを正し、誰が正しいかではなく、何が正しいか”を盛り込んで策定された「経済人コー円卓会議・企業の行動指針」の達成度合いを測定するために開発された「CSRイノベーション」の診断ツールが相次いで企業に導入されています。

実際に導入している企業の関係者からは、「この診断ツールを通じてこれまで社内で気づいていなかった強みや課題を把握することができ、今度どのように改善に取り組んでいくべきかという方向性が見えてきました」とのコメントが寄せられています。また、今年5月より「CSRイノベーション」に関しては一元的に運営管理で

きるような体制を強化していくことが必要との判断がCRTグローバル運営委員会(GGB, Global Governing Board)によってなされ、CRT日本委員会がこの重責を担うことになりました。これを受けて、CRT日本委員会で活躍されているメンバーが更に力を結集し、急ピッチでこれまで蓄積してきたノウハウや技術を国内外の協力団体に向けて提供する準備を整えてきました。

今後、日本だけでなくグローバルに、この「CSRイノベーション」が普及していくことが予想され、海外を含めたコンサルタント会社やその他の団体（豪州、米国、欧州など）からもCRT日本委員会とタイアップして普及できないかという問い合わせが来ています。

■日本企業の次世代経営者たちがコー・マウンテンハウスで学んだこと

社団法人日本能率協会（JMA）は、昨年に引き続き、CRT日本委員会と共同で、本年7月欧州において「JMAグローバル・ビジネスリーダー（GBL）コース」を開催しました。

このGBLコースは、日本のみならず欧州、米国、中国を訪問し、各地のリーダーや専門家と対話を繰り返しながら、リーダーとしての自らの「軸」を磨くことを目的とした次世代経営者育成プログラムで、今年は日本を代表する大手企業から選抜された12名の部長クラスのメンバーが参加しました。

7月1日～9日にかけて欧州で実施されたプログラムでは、1～2日にロンドンにおいてCRT次期会長で英国貴族院（上院）議員のブレナン卿、スタンダード＆プアーズ（Standards & Poor's）社のジョージ・ダラス氏、オックスフォード・アナリティカ（Oxford Analytica）のマイケル・ベイツ氏らと対話を行い、また7日～9日には、CRTの原点であるスイス・コー・マウンテンハウスを会場にセッションを行いました。特にコー・マウンテンハウスでのセッションでは、ICフランスの会長であるジョン・フォイエ（Jean Fayet）氏が、「愛（Love）」、「正直（Honesty）」、「無私（Unselfishness）」、「純潔（Purity）」というICの「4つの絶対基準」について言及され、対立を克服し、より良い社会を築くために何が重要かについてこのグループの方々との対話をされました。またメンバーは、到着と同じ日から開幕したコー世界大会にも部分的に参加し、分科会の討議やコミュニティでの活動を通じて、

各国から集まった参加者と触れ合いました。レマン湖を眼下に望む静かな環境の中、リーダーにとって大切なものは何かについて、皆さん深く内省をすることができたのではないかと思います。

最近、私が静かな時間を持つ時に、しばしば心に浮かんでくる言葉は、MRA（現IC）の創始者ブックマン博士の、「最大のことをすることを恐れないように祈れ」というものです。

CRT日本委員会
事務局長 石田 寛



●コーのマウンテンハウスを背景に

◆◆◆ IC ニュース ◆◆◆

■ 国連での諮問的ステータスを取得

去る6月にICインターナショナル(NGO)として国連経済社会理事会(ECOSOC)の諮問的ステータスを取得しました。国連経済社会理事会は54ヶ国のメンバー国をもち経済開発、貿易等の経済問題、及び人口、人種差別、青少年、人間環境等の社会問題を担当します。又、教育と保健の改善、世界各地の人権と自由の尊重といった問題についても、勧告を行っています。

このステータス取得により次のような権利が与えられます。

- 理事会やその補助機関の公開の会合にオブザーバーとしての参加
- 理事会が取り組んでいる問題について声明書を提出できる(求められた場合には口頭での発表もありえる)
- 国連関係の会議への参加(会議の準備委員会との共同作業や意見表明を含む)

■ IC オーストラリア国際会議

ブリスベーンで7月1日から4日まで開催されたIC国際会議に250名が参加し、その結果、大太平洋・アジアの国々での様々なイニシアティブが生まれるきっかけが生まれました。

近年のイスラムへの不信感とも相まって、オーストラリアとインドネシアの関係は難しいものになっていました。インドネシアからは、5千万の会員を擁する世界最大のイスラム組織であるナブラツル・ウタマのロズビー・ムニアル副議長、そして、人権コミッショナーのハビブ・チルジン博士も参加しました。彼等は会議で、司法長官や全国キリスト教会協議会会長等を含むオーストラリアのリーダー達と会いました。

教会の指導者や政治家、そして、ソロモン諸島における選挙浄化運動に関わる200名の青年たちの代表を含む25名がソロモン諸島から参加しました。その中の一人であるソロモン中央銀行の総裁は、「風土病にも似た国の汚職を取り除けるかどうかにか国の将来がかかっているので会議に参加したのです」と述べました。この汚職の問題は、インドネシアのナブラツル・ウタマでも焦点を当てていた問題であり、ソロモンからの参加者は、この問題の解決に取り組んで来たオーストラリアの

人々や、パプアニューギニアの元副首相、そして、フィジー市民憲法フォーラム役員たちと体験の交換を図ることが出来ました。

若い参加者達も、カンボジア-ベトナム、日韓、スーダンの北部と南部、そして、オーストラリアや大太平洋の国々の中でといったように、それぞれ信頼の構築に励んでいることを報告してくれました。それぞれのセッションの冒頭には活気のある寸劇が上演されましたが、これはこの会議の数カ月前から、青年達が何回もメルボルンに集まり練習してきたものでした。

「希望を抱いて帰ることができます」と参加したオーストラリアのアボリジニのリーダーが言いました。最後のセッションでは、50人以上の人々が、新しいビジョンと強い確信を述べてくれました。

8月にはICのワークショップがインドネシアで、そして、次の大太平洋・アジア会議が2006年の10月にフィジーで開催される予定です。

ジョン・ボンド、オーストラリアIC専従
(ワールド・プレティン7月号の記事から)

■ ソロモン諸島

大太平洋に位置するソロモン諸島におけるひどい内戦の後、人道的な救済活動に大きく関わった人が、和解に向けての彼の勇気に満ちた努力と来年3月に予定されている重要な選挙に間に合うようにと選挙浄化運動が青年達によって立ち上げられたことについて、スイスのコーで話しました。彼がその報告をしている間にも、オーストラリアのICのジョン・ミルズ氏、リズ・ウイークさん、そして、ナターシャ・デーヴィスさんが、ソロモン諸島

に向かっていました。それは、オーストラリア・ブリスベーンでのIC国際会議後に、人生における価値観、リーダーシップ、地域社会の構築に関してソロモン諸島の人たちにトレーニングを施して欲しいという要請に応えるためでした。6日間にわたったこのトレーナーを養成するためのワークショップを通して、参加者の信頼感が深められ、感銘が与えられました。家庭の崩壊による心の傷や最近の民族間の緊張等の話が初めて語られると共

◇◇◇ IC ニュース ◇◇◇

に、強い決意がなされ、既に解決に向けての動きが始まりました。このワークショップに参加したチームはソロモンのICに加わりたいという人々に自分達が受けたのと同様のトレーニングを提供すること、そして選挙浄化

運動の全国展開のための12の活動チーム(各チーム12名で構成)に加わることを申し出ています。(ワールド・プレティン9月号の記事から)

■第2回ICカンボジア-ベトナム・ダイアローグ

去る7月に、それぞれの国々から約半分ずつ計50人の学生が参加して、9日間にわたる第2回カンボジア-ベトナム・ダイアローグが、カンボジアで開催されました。カンボジアのICの会長であるキム・ブット氏は開会式で「私達は若いので過去に対する責任はありませんが、これから将来起こることに対しては責任があるのです」と述べました。

ベトナムのそれぞれの歴史、文化、紛争解決と和解といったテーマでのワークショップが6回開かれました。

このダイアローグは、関わった全ての人々にとってチャレンジに満ちたものでしたが、参加者の多くは「このダイアローグへの参加は自分の人生をまさに変える体験となった」と述べました。

(ワールド・プレティン9月号の記事から)

講演者の話しに加えて、自己の発見、カンボジアと

今後の予定 (日本)

- 10月 1日(土)～2日(日) 第28回IC関西秋季大会 於：大阪ロッジ舞洲
- 10月26日(水)～11月1日(火) 中国国際交流協会訪日受け入れプログラム
- 11月18日(金) 斎藤アンジュ玉藻さんによるバイオリンコンサート
於：ムジカーザ (ICよつ葉会主催)
- 12月 3日(土) 総会/講演会(東京) 於：日本カメラ財団

入会のご案内

IC (Initiatives of Change イニシアティブス・オブ・チェンジ、前身はMRA (Moral Re-Armament))は、1938年に ロンドンで発足して以来、対立する相手や国を変えたいと思うなら、先ず自分、そして、自国から変わるべきである」と言う理念に基づき、あらゆる民族や宗教や文化の根底に流れる共通の倫理観(モラル)を普遍的な絶対基準(正直、純潔、無私、愛)にまとめ、それを基盤にして紛争解決に不可欠な信頼関係醸成のための橋渡しを、世界各国で進めてきました。

当国際IC日本協会は、1977年より毎年世界各国の代表を招いて国際会議を開催し、相互理解と信頼関係の醸成に努めてきた他、講演会や各種会合、各国のIC国際会議への参加、新しい東アジアの関係構築を図るための青年同士の交流等々内外で様々な事業を行っています。ご入会された方には各種行事案内、又、機関紙等をお送り致します。世界情勢を知り国際的な視野を得ることができます。

年会費	1. 正会員	個人	6,000円	2. 賛助会員	個人	3,000円以上
		法人	50,000円		法人	50,000円以上

編集後記

厳しい残暑が続き、国内では台風や地震の被害のニュースが、又、アメリカからもハリケーンの大きな被害のニュースが伝わって来ました。犠牲になられた方々のご冥福を心よりお祈りします。

IIAJニュースの発行が遅れましたことをおわび致します。次号では、韓国で開催された第2回日中韓の大学生による第2回東北アジア青年フォーラムやコーの世界大会等についてご報告致します。

季節の変わり目、皆様くれぐれも御自愛下さい。